

2025 文化で滋賀を元気に!賞



大賞 桜で紡ぐ地域の絆文化賞

トンボとその仲間たち 代表 大石 幸夫さん／高島市 (受賞者・団体／主な活動地域 以下同じ)

〔講評〕

高島市新旭町の風車街道は、春になると654本の桜が約6kmにわたって満開となり、湖国の春を満喫させてくれる。

平成2年に「ふるさと創生事業」として植栽整備されたこの桜並木だが、15年を経たあたりから枯れ枝が目立ちはじめ、満開の桜はごくわずかとなり、湖岸の景観を寂しいものにしていた。

平成20年に、この桜を憂いた地元の有志5人が満開の桜並木を取り戻そうと「トンボとその仲間たち」を立ち上げた。特に毛虫の被害が大きく、害虫駆除から始め、施肥や枯れ枝の除去など地道な活動を行い、5年後には満開の桜並木が甦った。5人の有志から始まった活動は、徐々に参加者が増え、最大100人近くの集まりとなった。現在は、住民だけでなく、並木に隣接する企業も自主的に周辺の整備を続けている。

桜並木の整備だけでなく、琵琶湖治水の偉人「藤本太郎兵衛」の立像がある夕暮原公園を桜公園にしようと植樹活動も行い、18本の桜に協賛金を募ったところ、40人以上の応募があった。また、新旭南小学校には100年桜と呼ばれるソメイヨシノがあり、将来に残そうと、児童とともに接ぎ木に取り組み、地域の人たちは100年桜の2世が咲くことを楽しみにしている。さらに、新旭町内小学校の5年生を対象に「郷土愛」をテーマとした出前授業も行い、桜を大切にすることと郷土の景観を守ることを伝えている。

桜並木を守る活動は、その広がりとともに桜だけでなく郷土の風景を誇りに思い、守り続けたいという地元の心を動かしている。植物は大きくなるほど回復にも時間と地道な取り組みが必要となる。世代間でバトンしていき、人與人、そして時間を紡ぎ、景観を守っている「トンボとその仲間たち」の活動は、地域文化の形成そのものであり、その取り組みにエールを送りたい。

受賞者について

代表の大石さんは、約30年前高島市新旭に家建て、京都市内から週末ごとに訪れていたが、すっかり新旭の自然環境に魅せられこの地に移住してきた。以前から気になっていた桜並木を何とか甦らそうと、親交のある地元の人たちと5人でボランティアを立ち上げた。「とんぼ」のネーミングは、定年退職後に時間のある人が集まったので「極楽とんぼ」からとった。

まず1本ごとにナンバリングと個別に樹勢と開花率の記録を行った。樹木の専門知識は誰にもなかったため、代表自らがレイカディア大学へ2年間通い、園芸の知識を深めるとともに、出会った樹木匠の指導も仰いだ。害虫駆除、剪定、施肥、水やり、土の改良などを地道に続けた結果、活動を始めて5年後に樹勢が回復し、満開の桜並木が甦った。

観光やイベントの目的としてではなく、地元に植えられた桜とその景観を守り、育て、次世代に引き継いでいきたいと、この桜並木だけでなく、小学校へ出前授業や、接ぎ木の指導など次世代につなぐ活動を行っている。また、地元の偉人の業績を称える公園整備など、地域の大きな輪となり、好循環を生み出している。

高島市だけでなく他の市町からも活動に賛同する参加者が増え、一時メンバーは100人近くになったが、現在は高齢化も進み約80人である。メンバーにはそれぞれ得意な分野があり、作業や事務の分担がバランスよくでき順調に運営できている。しかし手入れには体力も必要で年々作業が厳しくなっている。メンバーたちは、子どもたちが成長して、郷土の風景を守っていく活動に参加してくれる日を心待ちにし、今後もこの桜並木が地域の絆として未来に咲き誇ることを夢みて活動が続けている。

表彰概要	■表彰の種類	(1)各賞 文化で滋賀を明るく元気にし、活力あふれる地域社会の実現に貢献している団体または個人(若干名) (2)大賞 (1)の受賞候補のうち最も評価された団体または個人(1名) (3)各賞の名称は、推薦者からの提案に基づき決定
	■表彰式	令和8年2月23日(月・祝) びわ湖ホール小ホール ※受賞者には賞状と賞金(大賞10万円、各賞5万円)を贈呈。
	■募集期間	令和7年7月11日(金)～10月31日(金)
	■候補者	募集期間内に推薦書を文化・経済フォーラム滋賀に提出。自薦、他薦は問わない。
	■選考	令和7年12月11日(木) 選考委員会で審査を行い、大賞・各賞を選考。
	■選考委員	秋村 洋〔(株)秋村組代表取締役〕 高梨 純次〔(公財)秀明文化財団理事〕 波田 晋一〔(株)しがぎん経済文化センター取締役社長〕 南 千勢子〔ピアニスト〕 村田 和彦〔(公財)びわ湖芸術文化財団理事長〕

滋賀と世界をつなぐ共同文化賞

山中suplex
共同代表 小笠原 周さん・小宮 太郎さん／大津市



は、広大な屋外スペースでミーティングを行い、宿泊はテント、風呂はドラム缶で楽しむなど、この地を活かした交流イベントとなった。

アーティストの共同作業から始まったスタジオだが、今や外部とのネットワークが構築され、アーティスト同士の交流から新しい表現が生まれる場へと発展するといった先進的な取り組みとなっている。次世代の芸術文化を育むプラットフォームとして、地域と世界のあいだに新たな文化の循環を生み出す山中suplexの今後のさらなる活躍を期待したい。

地域の力を未来につなげる文化賞

BRAH＝art.
代表 岩原 勇氣さん／大津市



「好きなこと、得意なことを仕事にして精一杯生きる」がBRAH＝art.のテーマ。障害の有無にかかわらず、誰かの「やりたい!」から事業は生まれる。その誰かは、利用者の時もあれば、スタッフや地域の人の時もある。

平成26年に大津市一里山でBRAH＝art.はスタートした。「雑貨屋さんをやりたい」その一人の思いを実現するために、アート展示の会場に雑貨を置くことから始め、少しずつできることを試し修正しながら、人の輪がつながることとで事業として立ち上げていった。

地元の商工会が始めた「勢多市」では、運営を引き継ぐことで事業者が、本業に専念できるようになり、支えられる側から支える側になることができた。令和5年からは、滋賀県立美術館と協働して企画・運営にあたり、びわこ文化公園全体をみんなで楽しむイベントなど、美術館のやりたいことを実現している。

事業を引き受ける重要なポイントは、常に相手にとってのWINは何かを考え、結果につなげること。そうすることでお互いがWIN-WINとなり、次の仕事や他の人とのつながりが生まれ、また新たに事業が始まるといった地域の好循環が生まれている。

多様な主体と連携し、アートを社会資源として活かす様々な取り組みを精力的に展開し、地域社会に新たな発見を見出す活動の独自性と継続性を評価した。活動を通じて得たノウハウは、今後のまちづくりや地域の活性化に活かされ、その活動がより多くの誰かの「やりたい!」を実現できることを期待したい。

湖北の舞台がひらく文化賞

中川能舞台
管理者 野上 寛子さん／長浜市



昭和6年に長浜の能楽師・中川清氏が、自分の住居に隣接して能舞台を創建。当初から中川能舞台は、稽古場、社中の発表会の場として、また、湖北を代表する近代画人の加納凌雲、国友敬三もこの能舞台で能楽に親しんだ。鏡板の老松は国友敬三によるものである。清氏と嗣子の雅章氏が2代にわたり湖北地域の能文化の継承と普及に努め、現在は雅章氏の娘の野上寛子氏が、西洋クラシック音楽や邦楽の演奏会など幅広い芸術活動の場として活用されている。伝統的な能舞台のつくりならではの独特の響きがあり、能舞台と一体となった響きは演奏者と観客を包み込み、幽玄な雰囲気醸し出している。能舞台は地域の人たちの交流の場として積極的に活用・公開され、歴史的資産の継承を核にししながら地域の文化振興に貢献している。

令和3年には、高度な農村文化と地域芸能の広がりを支え続けてきた建造物として、建築史、地域芸能史の双方からも貴重とされ、能舞台と能道具の

収蔵庫である土蔵が、国の登録有形文化財に登録された。文化財を保存するには、維持、管理、修復といった苦労がある。それを適切に活用し続けることで、湖北に伝わる地域芸能の拠点から新たな文化を生み出し、文化財の継承と新しい文化の拠点が生み出される。能舞台を能楽のためだけでなく、様々な発表、演奏の場、ユニークベニューとして活用されていることは大変意味深く、これからも地域に開かれた場となることを願い、注目したい。